

岡崎ホスピスケアを考える会通信

平成14年7月

16号

事務局：橋詰 0564-53-3100 小野 0564-24-8518 URL <http://www.sun-inet.or.jp/~nanba/>

5月の例会報告

会員 37 名・一般 9 名、合計 46 名の参加でした。

<感想文から>

テーマ「終末期の在宅ケア」<終末期の在宅ケアに関わって> 小出クリニック 小出義信院長

- ・医療のシステムと家族の負担（精神面も含めて）その他で在宅看護は、なかなか難しいようですね。
- ・自宅で死ぬことは、多くの人の願いですが、現実には立ち足る様々な問題をクリアするのは、大変なことだと感じました。先生が言われたように、“在宅”での目的は、究極のところ、“自宅で死ぬこと”なので、後悔のない様にしたいものです。その為にも自分が患者になった時、しっかり主治医を見つけ、大病院志向は考え直そうと思います。人間だけが死について考え選択できる特権を持っているのですから。

6月の例会報告

会員 48 名・一般 22 名、合計 70 名の参加でした。

<感想文から>

テーマ「緩和ケア最前線Ⅰ」<緩和ケアにおける看護師の役割>

講師：愛知ガンセンターがん性疼痛認定看護師 山崎祥子さん

- ・認定看護師制度ができていたことも初めて知りました。看護師の方々も日夜努力している事に感激し患者も勉強しなければと更に励まされました。
- ・癌患者にとっての苦痛緩和に対する携り方を、改めて勉強できる機会でした。在宅での疼痛コントロールは難しいところがあり、それは山崎さんも話されていたモルヒネの使用に対して十分な理解が得られないこと。病院で使用していても在宅に変わってからモルヒネ継続ができないなど問題が残っていると思います。少しでも患者さんの望む環境で最後まで過ごせる場の提供ができていくことを望んでいます。
- ・看護師として患者さんの死に携わることがあります。本日聞いた講演の中でありました“霊的苦痛”についてどう関わっていいか悩み、勉強を進めています。緩和ケアについてもっと深めていきたいと思っています。

◆ご案内

- ・9月7日（土）13時から、せきれいホールで、「知っておきたい最近のがん治療」と題して市民公開講座を開催いたします。講師は向山雄人先生（都立豊島病院緩和ケア科・腫瘍内科医長）、有吉寛先生です。主催：WJTOG（西日本胸部腫瘍臨床研究機構）会長：有吉寛愛知病院院長 後援：岡崎ホスピスケアを考える会
- ・10月26日（土）13時～16時 勤労福祉会館小ホールで「岡崎ホスピスケアを考える会5周年記念」テーマを<それぞれの立場からのホスピスケア>と題し、この間お世話になった講師の方たちを迎え交流会を行ないます。たくさんのお参加をお待ちしています。

例会

9月20日（金）10時～12時 勤労福祉会館 岩崎一二三神父

「死を受け入れてどう生きるか⑥」 <ガンになって初めてわかったこと>

手縫いの会（毎月第2火曜日）

9月10日（火）10時～12時 県立愛知病院看護相談室

10月8日（火）10時～12時 県立愛知病院看護相談室

つどい（毎月第3水曜日）参加ご希望の方は 橋詰：0564-53-3100 小野：0564-24-8518まで

9月18日（水）10時～12時半 場所 覚照寺 愛知大学 木村先生参加

10月16日（水）10時～12時半 場所 カトリック岡崎教会（明大寺町）

◆ 報 告

6月20日（木）安城更生病院緩和ケア病棟に7名で見学させていただきました。

- ・私は癌患者歴4年5ヶ月。病気を受け入れることで過度な治療は避け身体にやさしく負担の少ない治療を選択してきた。治療方法も自己責任の上で決定するというはとても大変だ。しかし、そうすることが自分らしく生きていく上での最良の方法と思える。終末期になっても同じだ。家族に負担を強いる在宅介護でなく最良の場所がこの緩和ケア病棟で見つかったようでとても嬉しかった。（柴山）
- ・全て個室でベッド数は17床。現在利用されているのがその内8床。それも平均4～5日という短期の利用に終わっているという。「未だ緩和ケア病棟本来の意味が理解されていない」と担当医の伊藤先生はおっしゃる。緩和ケア病棟とは決して死を待つ場所ではないはずだ。ガンの治癒や延命を目指す治療は行わず、治癒は難しいという辛い事実を受け入れ苦痛から開放され、できるだけ豊かに満たされて最期を迎えることができる、これが緩和ケア病棟。それにはいつ入院するかという自分自身の判断に委ねられている面が大きいことを痛感した。（堀）

“つどい”について

5月7名・6月8名の参加でした。

- ・最近とても心が軽くなっています。昨年9月に夫を見送って以来、「何もして上げられなかった。もっと大切な話があったはず」と、思い患う毎日でした。でも“つどい”に参加し自分のことを話すうちに楽になってきました。一生懸命私の話を聞いてくださる方がいらっしゃるからです。そして他の方のお話を伺うことで知恵や元気をいただいています。（日野）

手縫いの会報告



人数も増えてきました。とても嬉しく思っています。タオルの不足が心配になってきました。ぜひタオルの寄付をお願いします。少しでも患者さんと看護師さんの橋渡しが出来ればと思い、一針一針心をこめて縫っています。

「手縫いの会」連絡先：服部0564-23-1263　米内0564-53-3290

5月・6月 雑巾：240枚（愛知病院、市民病院）シイネカバー：20枚（市民病院）に届けました。

伝言板

<しっている>

「3歳の孫、春に初めて友達が遊びにきてくれたのですが、早々試練がやってきました。大切にしているポちゃんを貸して欲しいと言われてしまったのです。孫は私の顔を見て助けを求めましたが、知らないふりをしていました。泣きそうになりながらも彼女なりのもてなしをしたのでしょう。ポちゃんを差し出していました。後で「優しいね、我慢して貸してあげたんだね」と言ったら孫はこう答えました。「ばばは春のことしってる」と。毎日一緒にいる私への最高の誉め言葉だと思いました。

Yさんは「入院中一番嬉しかったのは先生がスポーツ新聞を読んで遊んで行ってくれたこと」と、亡くなられたご主人の思い出を話されました。治らない病気の夫と奥さんの病室に今、何が必要かを知っていた先生ではないでしょうか。

縁あって関わりあった人をしろうとすること・・・しているだろうかと自問したひと時でした。（橋詰）

事務連絡

- ・10月の5周年に向けて文集の原稿を募集しています。テーマは「私にとってのホスピスケア」
- 会員の方の「ひとこと」も載せたいと思っています。どうぞ“ひとこと”をお寄せください。

TEL/FAX 0564-53-3100 橋詰まで

編集後記

自分が最期を迎えたときに「いい人生だった」と言えるように、普段から努力してきたつもりだ。しかしこの会でいろいろ勉強していくうちに、残された人たちの気持ちも大切にしなければならぬ事を知った。互いに「いい人生だったね」と言えるようにするには、今何をしたらいいのか、新しい模索が始まった。（難波）